

# サトウキビサプライチェーンの持続可能性向上を目指すボンスクロ認証

研究員 片田百合子

近年、環境や社会、ガバナンスも踏まえたサステナビリティ経営が重要視されている。企業は原料生産の環境負荷や生産者の労働環境等に配慮した調達といった対応を求められ、このような原料調達は、農作物の持続可能性に関する認証を受けた製品の利用で達成される。

ここでは、飲食料品、化粧品、燃料等の原料となるサトウキビの持続可能性に関する「ボンスクロ (Bonsucro) 認証」について解説したい。

## 1 ボンスクロ認証とは

英国の非営利団体ボンスクロが運営する「ボンスクロ」(注1)は、経済、社会、環境に着目した持続可能なサトウキビの生産・利用の促進を目指す国際的なプラットフォームだ。2025年3月末で50か国以上から300者以上の企業や協会等が会員として参加し、会員数はアジア(79者)やブラジル(74者)で多く、大半は川上のプレーヤーだ。

一方、欧州(57者)や北米(21者)の会員は、主に認証製品の流通・加工業者や調達者、プラットフォーム内で取引される「ボンスクロクレジット(注2)」の購入者とみられ、飲料企業のペプシコ社や食品企業のダノン社等も会員だ。南米やアジア等からの認証製品が、サステナビリティ関連の取組みが進む欧州・北米等で利用されていると推測される。

なお、日本からは5者が参加し(注3)、これらは砂糖やバイオ素材を扱う商社やメーカー、サステナビリティ関係のNGOであった。

ボンスクロの主な取組みのひとつが認証制度の運営だ。2011年に始まったボンスクロ認証には、サトウキビやサトウキビ由来製品(注4)の持続可能な生産に関する認証と、製品の流通管理に関する認証の2種類がある。前者は、サトウキビ生産者や製糖企業、後者はサ

トウキビ生産から最終製品の製造等のサプライチェーンに関わるプレーヤーが対象となる。

前者の認証では、環境負荷削減や生物多様性の保全のみならず、労働環境や生産効率の改善に関する項目も認証基準に含まれる。具体的には、まず「環境、社会、人権リスクを評価、管理する」といった5つの原則があり、これら原則の準拠に必要な20の基準が設けられている(第1表)。

例えば、持続可能性に向けた生産効率等の管理(原則3)への準拠は、「原料生産・製糖効率の測定と改善」という基準等で測られる。さらに、20の基準への適合を判断するものとして69の測定指標があり、これらは①認証取得に必須の指標、②定められた期間中に適合する必要がある指標、③任意指標といった3種類に区分できる。基準に対して測定は、サトウキビの品質指標である回収糖分(TRS)の値等が使われる。また、測定指標には、農薬や土壌の管理計画等、管理計画を立てて実行するという性格のものが多く、計画は一定期間内に見直される。

後者の流通管理に関する認証は、トレーサ

**第1表** ボンスクロ認証(生産段階)の5つの原則および基準の例

原則の内容		関連する基準の例
原則1	環境、社会、人権リスクを評価、管理する	<ul style="list-style-type: none"> <li>持続可能性管理計画の策定と実施</li> <li>リスクと影響の体系的な評価</li> </ul>
原則2	労働者の権利と労働安全衛生基準を尊重する	<ul style="list-style-type: none"> <li>すべての労働者に適切な生活水準達成に十分な福利厚生と賃金の提供</li> </ul>
原則3	持続可能性向上のために投入物・生産・加工の効率性を管理する	<ul style="list-style-type: none"> <li>原料生産・製糖効率の測定と改善</li> <li>温室効果ガス排出量の測定</li> </ul>
原則4	生物多様性及び生態系サービスを積極的に管理する	<ul style="list-style-type: none"> <li>土壌侵食を防止し土壌健全性を維持・改善するための管理計画の策定</li> </ul>
原則5	事業のその他の重要分野を継続的に改善する	<ul style="list-style-type: none"> <li>経済的・社会的持続可能性の促進</li> <li>労働者福祉の継続的改善</li> </ul>

資料 ボンスクロWebサイトから農中総研作成

ビリティを可能とするものだ。認証製品を購入し、取り扱い、または販売し、最終製品への認証ラベルの表示や認証製品の利用をラベル表示等で主張したい組織は、ボンスクロの会員となり、流通管理に関するすべての基準（購入書類等の保管や生産記録といった記録の管理、購買時の供給者の認証取得状況の確認、認証製品の入出庫量の管理等）への準拠が求められる（注5）。

## 2 ボンスクロ認証の普及状況

認証を受けたサトウキビの23/24年度（注6）の収穫面積は2011/12年度比7.7倍となり、世界のサトウキビ収穫面積に占める割合は9%だ（第1図）。認証面積が最も広いのはブラジルで200万ha、次いで中米・メキシコ・カリブ海（12万ha）、アジア（10万ha）と続く。

同認証を得た砂糖の生産量は同期間で9.7倍増えた。同じく認証を受けたエタノールや糖蜜の生産量は足元で伸び悩んではいないものの、18/19～23/24年度の5年間でそれぞれ1.5倍、3.0倍に増えた。

## 3 認証がもたらす生産者の行動変容

管理計画の策定、実施、評価を繰り返すことで、認証取得期間が長いほど、生産段階の環境負荷は低減するようだ。例えば、認証取得から10年経過した生産者では、平均的な灌漑効率（注7）は認証取得時と比べて2倍ほど改善され、製糖工程の平均的な温室効果ガ

（注1）前身組織は2007年設立のベター・シュガーケー  
ーン・イニシアチブ。

（注2）認証生産者から認証製品にひもづくクレジット  
を購入した者は持続可能なサトウキビ生産への  
関与を主張できる。

（注3）2026年3月19日時点。

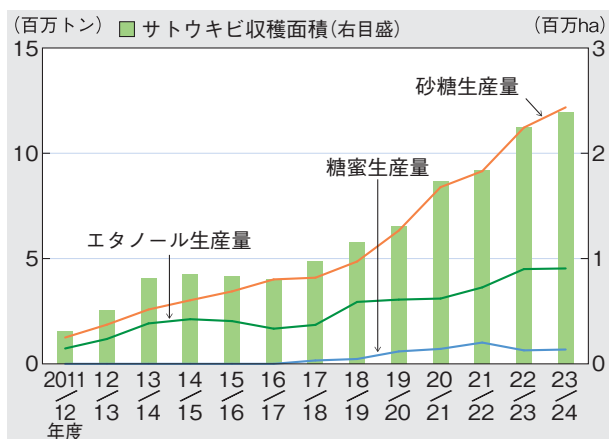
（注4）砂糖、バガス（サトウキビ圧搾後の残さ）、糖  
蜜、エタノール。

（注5）物流業者や、最終製品の製造・包装・表示に  
携わらない卸売業者や小売業者の場合、流通管理  
の認証取得は不要。

（注6）砂糖年度。

（注7）1haの土地に使用される水量に対するサトウ  
キビ生産量で計算される。

第1図 ボンスクロ認証を取得したサトウキビ収穫面積および認証製品の生産量



資料 Ferreiraら (2025)「Outcome Report 2024-2025」を基に農  
中総研作成

ス(GHG)排出量は24%減少した。一方、サトウキビ生産に用いる肥料や燃料等に起因するGHG排出量や農薬使用量等、さらなる改善が期待される項目もある。

労働環境の改善も顕著で、農場や製糖工場での事故発生率は認証取得後5年間で4割程度低下した。測定指標の順守の対象となる労働者数は、農業従事者17万人、製糖工場の労働者11万5000人にのぼる。

## 4 ボンスクロ認証の課題

ボンスクロ認証の課題として、認証ほ場が主な輸出国ブラジルに集中している点がある。自国での消費割合が高い産地では認証取得のインセンティブは高くないようだ。また、施肥量や燃料使用量の削減を通じたサトウキビ生産段階のGHG排出量低減も今後の課題だ。生産性と持続可能性を両立させようとする、大幅な低減は難しい可能性が考えられる。

サトウキビはさまざまな製品に用いられる原料だからこそ、そのサプライチェーンの重要性を生産者、企業、消費者で共有し、持続可能性を高めていくことは重要だろう。

### <参考文献>

・ Ferreira, L., H. Beth and T. Norma (2025), "Outcome Report 2024-2025," Bonsucro.

(かただ ゆりこ)